

水戸藩内抗争の犠牲者結城寅寿

子孫は市野澤寅雄氏「茨城大学名誉教授」、結城達也氏（日立市在住）

（結城寅寿とは……）

南朝の忠臣として知られる結城宗広の末孫で、先祖は光圀に見出され水戸藩に仕え、三代晴久は執政となった名門。十六歳の時、江戸に召されて斉昭の小姓となり、二十三歳で小姓頭にあげられ、その年に藤田東湖を追い抜いて若年寄となった。東湖と共に勝手掛や学校造営掛などを兼務し、天保十三年（1842）には二十五歳の若さで執政の要職につく。

門閥派の寅寿は、腹心の肥田大助を江戸家老にするなど派閥色を強め、改革派（藤田派）を排撃。社寺改革には両派の対立がからんで斉昭をはじめ改革派が失脚し、斉昭は寅寿を「藤井などより見候えばその罪百倍すべし」とののしる。弘化元年（1844）藩主の座を追われた斉昭は嘉永元年（1849）に藩政関与を許され政界復帰。それに合わせ改革派が再登場し、門閥派を弾圧。寅寿は安政三年（1856）四月、拘禁先で処刑される。四十歳だった。

斉昭の激怒を招く藩内抗争に負け、那珂郡長倉村の松平家の陣屋に一室に拘禁されていた保守門閥派のリーダー結城寅寿は、安政三年（1856）四月、改革派の手によって斬首される。……は血で血を洗う凄惨ものとなり、殺戮戦は明治初期まで続く。そして多くの有為な人物が失われた。寅寿の死は、まさに幕末水戸藩悲話の序章といえよう。

「藤井などより見候えばその罪百倍すべし」とまで斉昭にいわれた寅寿の罪状は明確でない。伝えられているのは、弘化元年（1844）に幕府の行った斉昭幽閉、藤田東湖らの蟄居が寅寿の陰謀によるもので、結城一派は斉昭、慶篤、慶喜を廃して、

高松侯を水戸藩主に迎え、藩政を自由にしようかと企んでいたという。斉昭が激怒したのは、改革派が主流を占めているなかで対立する門閥派の寅寿に目をかけ、出世コースを歩ませたにもかかわらず、その恩を忘れ前述のような裏切りをしたからというにあった。

寅寿は大悪党だったのか。

保守派に利用されたか

高瀬真郷はその著「水戸史談」の中で「青山延寿のみる所では結城は天狗派（改革派）のいうような悪逆無道、人面獣心の国賊というような、

人物でなく、ただ如何にやり手といっても千石とりのご家老の若様育ちで世間知らず、保守派に利用され、親分にされ深入りしすぎた。組織力に富み、身分の高い先輩にも百姓町人、女子供にも親しまれ、信頼されていたと指摘している。寅寿に子孫として無類の愛情を持っているという市野澤寅雄さんは、しかし、「寅寿は、酒を飲むほかなかった親（数馬）に比べ野心家であり、政治屋だったが学問は無かったのです。大変な大人物でもないと思います」と学者らしく冷静な目で寅寿をみている。又、寅寿の人となりをもっと公平に知るには藤田東湖の「結城寅寿行状記」が一番ともいう。

家族にも厳しい弾圧 尊攘派の結城派への弾圧は厳しかった。寅寿には一男一女があり、

兄の種徳（伊之助）は寅寿の処刑と同時に入牢、絶食して死ぬ。妹のみちは大森信成の末子・道家（七之介）を養子に迎え、千代を産む。道家はのちに諸生派に属し越後で官軍と戦い戦死。尊攘派の弾圧は女子供にも及び、みちと幼い千代は、寅寿の妾なみに連れられ水戸脱出を図るが、探索中の尊攘派に見つかってしまう。

ところが、そのリーダーは、かって、みちに求婚した若者で、見て見ぬふりをしてくれたら、一行は難を逃れた。市野澤さんは「私が現在いるのもこの若もののおかげ。感謝している」という。一行は、県北を転々としたが、誰も、尊攘派を恐れかくまってくれず、やつと、栃木県矢板市の伊東家が受け入れた。千代は長じて伊東宗一郎の二男、四郎を養子とし、光雄、寅雄を産む。寅雄は同県上野村の市野澤家の養子となる。

巡査の養父は、市野澤さんを官吏にしたかったが、市野澤さんは意に反し東大で哲学を学ぶ。「私にも謀反の気があるんでしょうか。養父には申しわけなかった」と笑う。光雄の長男・達也さん（元・日立工高教諭）が結城家を継いでいる。達也さんは「寅寿に興味はないし、ほとんど知りません」という。

茨城新聞社・昭和22年発行「茨城人のルーツ」より